

売られてました。子供がお菓子がわりに買ってました。

戦中戦後の糖分欠乏のころ、愛知県のある水産試験場では、アマモのその部分から糖を煮出して実験の培地用の糖として使うことを試してみたとのこと。

私は名人に居たとき、アマモの甘味成分をしらべようと思い、抽出をやってみました。どんな糖であるかの同定には失敗（おおよその見当だけ）。今の進んだ手法でやれば、かなりた易く判る筈。どなたか、やって下さいませんか。

大滝氏の図鑑に「果実は食糧資源にもなる」とあります。近年、アマモの果実（コメ粒ほどの大きさ）の食糧資源化のことがとりあげられ、有力な国際研究組織が動き出しました。コメ・ムギに代わる次の時代の穀類、というキャッチフレーズです。（いずれ詳しく紹介したい）。

(2) ヒ シ。中国では近年、食糧用にヒシの品種改良（育種）が進んでいる由。

(3) クログワイ。ふつうのクワイ（オモダカ科）とよく混同されますが、クログワイはカヤリグサ科。私の生まれた越後では、以前は八百屋で普通に売ってました。さくさくと歯切れのよいもので、私はクワイよりもこの方が好きです。

人間およそ、いざとなれば毒のあるもの以外はなんでも食べる。古今東西、想いもかけぬ水草を食品に利用してきたことでしょう。皆さまの体験や見聞を、おしらせ下さらば幸い。

## VI 水草の単行本（日本）（原田市太郎）

手もとにあるものを、とりあえずリストしました。お気づきの単行本、おしらせ下されたく存じます。

（陸水学、湖沼学、生態学の本には多少なりとも水草の項目がありますが、それらの本は割愛。）（リストは発行年次順。絶版、定価変動のものあり。）（次回には、外国の単行本を紹介する予定。）

学習図鑑シリーズ(5) 1951 淡水の生物図典 日本出版社 ￥280

保育社のポケット図鑑(12) 1953 池や川の生物 保育社 ￥150

牧野富太郎鑑修 1961 (第5版) 海藻と水草(原色図鑑ライブラリー30) 北隆館  
￥160

近藤龍雄 1963 水草園芸 加島書店 ￥450

和泉克雄 1968 水草のすべて 緑書房 ￥1500

立花吉茂 1971 水草 栽培と楽しみ方 文研出版【定価不明】

生嶋 功 1972 水界植物群落の物質生産Ⅰ水生植物(生態学講座7) 共立出版 ￥1100

堀田 満 1973 水辺の植物(カラー自然ガイド6) 保育社 ￥280

大滝末男 1978 (第3版) 水草の観察と研究 ニューサイエンス社 ￥900

浜島繁隆 1979 池沼植物の生態と観察 ニューサイエンス社 ￥650

大滝末男 1980 日本水生植物図鑑 北隆館 ￥8000

## VII 水草研究の開拓者、三木茂博士のこと（原田市太郎）

故三木博士は盛岡高農から京大理学部へ入れ、故郡場教授の植物生理学講座で生態学・生理

学との関連の立場から形態学・分類学・古生物学など広い分野の研究をされた。京大講師ののちニューギニアへ仕事に行かれ、戦後、大阪市立大教授となられ、定年退官後は武庫川女子大教授であられた。

昭和49年ご逝去。博士は後世に残る数々の業績をあげられた。

初期のお仕事は、水草の分布・分類・形態・生態に関するものである。多数の学術論文（英文）を発表され、その総括ともいえるのは「山城水草誌 昭和12年 京都府史蹟名勝天然記念物調査報告第17冊」であろう。この刊行物は一地方の調査報告の形であるが、内容は戦前の日本全国の水草をすべて調査された“日本産水草植物学”とでも申すべき高度な学術的著作です。

これによって日本の水草“学”は確立され、水草研究に志す者の唯一の原典であると思います。すべてご自身で採集し栽培（京大植物園内に広く工夫をこらした水系環境を作られた）され、解剖学（茎葉の）・発生学（発芽様式など）・生態学（生育水系の様子）などを克明に記述され、すすんで水草の進化・分類体系の論考に及び、全く他に類をみない労作であります。それまでの諸外国の水草の本にも例のないことです。

この「山城水草誌」は特殊な刊行物なので入手困難でありましたが、戦後大阪市大の有志が復刻本を作られました；残念ながら、それも既に残部がなくなりました。

博士はつづいて水草の調査をされましたが、主力は古生物学（化石や遺体植物）に向けられたようです。水草の化石・遺体の論文も多数ありますが、むしろ一般には“生きている化石”といわれるメタセコイヤ（裸子針葉樹）の三木として有名でしょう。

私はあるとき、三木博士に「先生の水草ご研究の動機はなんでございますか」とお尋ねしました；お応えに曰く「いろいろ有るが、生れ育った香川県の田舎には溜池・池沼・小川が沢山ありまして、水に親しんでいたことが大きな影響でしょう。」と。

日本の水草研究の開拓者、世界的な水草学者であられた三木茂博士の名は、この会の導きの星として永遠に輝くものであります。 合掌

## 後 書 き

昨夏の第1回集会以後なんの活動もせず今日に及び、会員の皆さまに多大なご不審とご迷惑おかけ申しました。

私をめぐる公私の事情、遠い札幌の地などのことを考えずに、怠け者の私が会長となったのがそもその間違いでした；うかつのいたり。この春からは沖縄へ移りましたので、さらに困難な事態となりました。

今回の集会を機会に、会長を辞めさせていただきます。“無責任な逃げ出し”の形で、心苦しいのですが。

この会第1号は、時日の不足のため、私ひとりで勝手な記事を作ってしまった。今後はバランスのとれた“開かれた”会報となるものと期しております。（8月1日 原 田）